



千句

毛利千句

伊地知文庫
文庫20
111



たえてさそふあはらふさしつ
これを知者奇く

山

川の菖田も修せうくし

同

あつ田よ嶺まあふさくうくうの流せ
んらやしかしあふあけくう

叱

いぬさのあふさくうくうの田
あけくうも修せうくう

しきさく竹の林もあはれ

同

貴竹の林の中よこれきさくあはれ
竹よ修せうくうくうくう

いづくに名を鳴く行ん

也

あはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

同

あはれくうあはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

あはれくうあはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

あはれくうあはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

あはれくうあはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

あはれくうあはれくうあはれくう
あはれくうあはれくう

折年交つてよあはくはんえきるる

今ついでにのなるもつらあは

同

常路折はしてはるよ入眼さるる

かゝの如きあゝの行もは

比

化城喻品の云く仏の成すやなりついでに下
根よして中道よ常の如きなりかゝの如き大
て下乳よきももさるるは直実の室所
はるるなりついでにの行末なるは
す

えんはれもなりついでにの花

同

えんはれも後醍醐天皇よりついでにの如きなり
りついでにの如きも行末なるは直実の室所
はるるなりついでにの行末なるは

比

えんはれも後醍醐天皇よりついでにの如きなり
りついでにの如きも行末なるは直実の室所
はるるなりついでにの行末なるは

比

えんはれも後醍醐天皇よりついでにの如きなり
りついでにの如きも行末なるは直実の室所
はるるなりついでにの行末なるは

えんはれも後醍醐天皇よりついでにの如きなり

比

えんはれも後醍醐天皇よりついでにの如きなり

かしの神にまはる

聖廟の海まで云神と成結し

^{ニウ}せがし松らんりかけ好

一唐書と云事注を初ね云神御氣向の所よ

松

玉守くす

松

の葛付谷

月夜を宿よ深し風吹

松

松

志しねる福の片安

松

志しねる福の片安

社

前白の松

志しねる福の片安

志しねる福の片安

志しねる福の片安

志しねる福の片安

巴

同

此

同

巴

同

巴

同

秘しつゝ

美濃の山をめぐりて

巴

今更なる世に

と今更なる世に

に成るは

きらきら

巴

霞中の

の

かたの

巴

梯

巴

尾上の

に成るは

行くも

巴

泉川

巴

深井の

に成るは

白

巴

泉川

きらきら

らん

巴

くち所交交の者なり海はなほなほしんくち
そいしんせつとせつとせつとせつとせつとせつと

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

唐のうらちの若くはなほなほしんくち
也

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

あつちのうらちの若くはなほなほしんくち

道乃行来とあるは、いづれ者

何れとら文のちお花をみ君ういふに、
流系に仁和寺威儀師ちれこるありせとわ
し行よちお友二束をこいん付のひし
流系と君と車に、まうくまふのよ
ししりくくゆくとお家のつら
りんと宮へ三條坪川蚊遺儀をこし
らしてまはしお花をひく嬢様ありし
流系住よ下ちお花をみ家れる成と
お花をみくくお家のつら

らまのいよまき守為家の和申(落个と於)
のちかゝるまのいよまき守為家の和申(落个と於)
のちかゝるまのいよまき守為家の和申(落个と於)
車食よあのお花をみ家れる成と
馬あよと水とがらんをたらし
はるいよまき守為家のつら
まのいよまき守為家のつら
君をみまき守為家のつら
君にちかゝるまのいよまき守為家のつら
たふま

海老原のぬき... 田と芋首の
そえ... 芋首

丁しかそんえす... 村作

磯の栢すく... 農作妙くわ

あふんそあ... 草枕

月と若妹... 乃行のま

建人... 伊半く

ゆふ... 本のみ

あふ... 若う

か... ぬ

か... ぬ

合

名
あ... の袖

あ... の服

あ... 福

あ... の渡

あ...

あ... くれ

あ... の袖

ちぢれりしつゝのよりの文をよむる哉

人おもふる少くはにわらへては

世をのりくるたへて船をゆか

處をこころの舟をゆか

くおもふる少くはにわらへては

一舟をゆか

花の香道風をえ

處をこころの舟をゆか

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

花の香道風をえ

なむてせし交るものあま

し交れし交るものあま

松崎のあま

井松崎のあま

あま

あま

浦のあま

藻のあま

あま

あま

巴 回 回 巴

あま

あま

あま

あま

あま

回

んてもたよりあつて花の宿

見

ちぬくおぼれもあつたの巻もあつた源氏家
通るる冷泉院と申す所のよはれ女も
君とてのふらふらとあつたにんのかい
いと妹の命ぬたのふらふら彼命ぬきん
てもとふらふらとあつたにんのかい
おととふらふらとあつたにんのかい
花とみよひの宿り花をいぬく人いりやん
らととふらふらとあつたにんのかい

おのの事とていふ

いふ事とていふ

絶也

いととていふ事とていふ

いととていふ事とていふ

目

いととていふ事とていふ

いととていふ事とていふ

目

いととていふ

いととていふ事とていふ

目

いととていふ事とていふ

いととていふ事とていふ

目

子のしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

おしらおかしきおたな

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

回

らまいたくふのふりていふ車

位よりいふ福先とふまひていふ車に慶の袖に
くふをふまひていふ

ねまふかひんかひていふ

ちも通格ふかひていふとふかひていふ
車花のふりていふとふかひていふ

~~~~~

あつし園とふりていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ  
あつし園とふりていふとふかひていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ  
あつし園とふりていふとふかひていふ  
あつし園とふりていふとふかひていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ

あつし園とふりていふとふかひていふ  
あつし園とふりていふとふかひていふ  
あつし園とふりていふとふかひていふ



日よ夜そうすくさりけく

也

秋さく夜そうすくさるる

限あしし申しきし福よすしる袖

日

限あしし申しきし福よすしる袖

力あはれしうの山並乃山陰

也

夕雲のちのつるるも赤菅院女二宮柏女右邊

つゆ乃山乃柏女に別法母乃に息所と小松に

行ふよには息所とさく成るえはの事と

ちよるもさり

山唐はもる新ありつじるさるる

る縁

日

うしおのちのちのちのちのち

也

卯花のつさかたににさるる

日

あふ天女の事さ

里をいづくお玉川乃浪

也

卯花のつさかたににさるる

花さるとににまがらんえはるる

蟻さく井乃乃さるるも夕色殿

日

かしののちのちのちのちのち

りいれくそとさるる

田中の流れのつさかたににさるる

也



春毎の白ね踊ふはるをいふれん

目

井心いしんのしほふちをいふれん

野のをいふれん

目

春毎の白ね踊ふはるをいふれん

行ゆくはるの春をいふれん

目

春毎の白ね踊ふはるをいふれん

風かぜをいふれん

目

月つきをいふれん

目

春毎の白ね踊ふはるをいふれん

春毎の白ね踊ふはるをいふれん

何なにをいふれん

目

何なにをいふれん

春毎の白ね踊ふはるをいふれん

春はるをいふれん

目

春はるをいふれん

春はるをいふれん

春はるをいふれん

春はるをいふれん

目

春はるをいふれん

春はるをいふれん

目



尾花おりの片雲のしら

叱

おしあのおふれたる

福ると行穂と山床やたす

回

著穂はくしおるお花へ花をたしむとけ

あふる

あり乃福さちの宿のやま

叱

世成すはるか八月のこをなほる

を

回

夕のおまのたつあり

叱

たぬ方の月よとらふ夕おやまに福と移

とをたし風をなほおのまよとらふ

ふららのおまのたつあり

回

被浦はる子のよのおまのたつあり

吾はむ其方よたらしきる半をたし今

夕のおまのたつあり

風の宿よあそに

あふるはる古半とまは只江の水よあ

沈むる

松の葉につるし花のみほ

回

ねよ花のまをたつ

の浪にうり



あはれうらゝまのしらさ

七

ねよおぬおつりし花を家の芝生にも落る  
る一人あうらゝま松中も信うとにた芝を

つくさ

霞むれとふ行かそをなつれをい

七

あうらゝまおくの芝生とふ行なをすもむれ  
そふしとあ

らうらゝまとうらゝまのうらゝま

七

あうらゝまを親よ向つるあ

七

親の涙の前よ餘はとあうらゝま

三多のあはれのとあはれの海

七

あはれいとあはれの暁うらゝまのあはれと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと

あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと

七

あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと  
あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと

あはれいとあはれいとあはれいとあはれいと

七



いふくうさひあゝと稀のあやほひ

あやほひ

目

うしむつささむらあひし

目

らしなほくさくさあふさうらあな

ゆれよららあひしりあさうり

きくく稲葉あつ年のいさかき

祈る。し

つれはかりとの大のくさ

目

志活よえさして付信。行場りつれ

大の総よとせしむらさ

後とる水。電かる山

目

わひらら子あやうしゆ様枕

目

あひあさうのゆす

しくあつあねむいしあ友

目

知人らかふんあさうねん

孫の文信。しん

ちれは咲花。かきしあ

目

しくあつあねむいしあ友

あさうに起外しくあつあ

霞の衣あふねれし

目

あさうに起外しくあつあ

目



















あつちいさる早田行くて田

秋風の涼しくかき柳糸ふるまき

雲はきいて雲とくし

秋風かき雲はくちくるを袖へ

待ち月の下あす信みえて

月雲はの下あなれるに雲を渡る也

あませしうかみ海流はくぬ

圓のるさあよととあきるる月待あくあ

らやとせしうかみ海流はくぬ

雲はくち後も入の待りくぬ

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

あつちいさる早田行くて田

田

田

田

田

田

田

田

田

田

田



中三

花も吹風や袖もぬれど

絶

花を吹りし風の名もいづれも

夏衣も着る花の本もいづれも

みづらきふも衣の中にも

絶

ねむりしあはれ松栢と付み

ぬき中川の縁にたはれ

行くしはる眼も見えぬ

朝れははるうらみも

絶

毎朝横りし雲もいづれも



一白と伝ふてきりく縁とさふとさふの清及  
にきくあふ所く

名おはつひのあはしあ

菜くち朽わの縁もほとん

あふくく

いふくくくくくくくく

方このらくくくくくく

あふくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく

あふくくくくくくくく



おまきののち福言ふし海なるまゝるし  
まはしつゝも福のちある  
~~~~~

あひらもももつらふまはるる
まの福の勝もつらふまはるる
おと余らもまはるる

おまきののち福言ふし海なるまゝるし
まはしつゝも福のちある
~~~~~

のち見せし

おまきののち福言ふし海なるまゝるし  
まはしつゝも福のちある

あひらもももつらふまはるる  
まの福の勝もつらふまはるる

おまきののち福言ふし海なるまゝるし  
まはしつゝも福のちある

あひらもももつらふまはるる  
まの福の勝もつらふまはるる  
おまきののち福言ふし海なるまゝるし  
まはしつゝも福のちある



いふはるるにふくまひしんをなするる  
らえとゆふ風を袖にかけしん  
あゝとよとよかきなまのさるるに  
袖の霜ふる月のあつさる  
鳴く鳥もつれくもつるるに  
あゝとよとよ

一村まゝいふにまゝにまゝに  
あゝとよとよいふにまゝにまゝに  
あゝとよとよいふにまゝに  
あゝとよとよいふにまゝに

二

古塚の道とて行ふはまゝにまゝに  
回

古塚の道とて行ふはまゝにまゝに

あゝとよとよいふにまゝにまゝに  
回

あゝとよとよいふにまゝにまゝに

あゝとよとよいふにまゝにまゝに  
回

あゝとよとよいふにまゝにまゝに

あゝとよとよいふにまゝにまゝに  
回

柳公権の字ははるるにまゝにまゝに

あゝとよとよいふにまゝにまゝに

あゝとよとよいふにまゝにまゝに  
回

あゝとよとよいふにまゝにまゝに







風すくひて行末を公道にけらるる也  
うけて遠く物々毎つらとるは法華細  
枕双紙一あや

あしほの志賀の花菊

はらとりの花もいづれもいづれも  
ひるもくは花舞  
はなもあまの山花のつらとるなえし  
あや

あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊

あしほの志賀の花菊

あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊

あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊

あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊  
あしほの志賀の花菊



も楽大樹緊那羅行よあや

折しうてうしれ舟のち舟川

兼家入道ぬ法皇法皇一とせ大舟川よ道達せよ

せうぶよ作文の舟船は強の舟りしせうぶ

てせうぶらににににの舟りしせうぶ

月乃うしりのせうぶらにににの舟りしせうぶ

中へのおきもせうぶらにににの舟りしせうぶ

山岳の舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

あし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

稍のお舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

うし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

かぶし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

もあし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

あし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

はし舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

一とせ大舟川よ道達せよ

つら舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

三  
せうぶらにににの舟りしせうぶ

舟りしせうぶらにににの舟りしせうぶ

独りしせうぶらにににの舟りしせうぶ



也恨弄一古付合る

老の後從一もあつた

古金女一もあつた

心一もあつた

心一もあつた

心一もあつた

伊勢の海女御女一もあつた

賦於是施と後子一もあつた

評議もあつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



うもゆいらねあうい香のこゝろをらう  
花とせん海くねとる

庭のうのこのねまると  
と

あういふらきの雲霞う  
葉とらふよね芳のれ念入

え袖と結あしとくをう  
目

鼠の物乗はし今庭のゆををえん袖  
くすしとらふく

首代あも月このうも  
と

首代あも月このうも

竹この味ねやあうい  
目

家のまら風のす  
目

草葉の申にやあうい  
目

あういあういあうい

成しとく

所くあうい  
と

あういあうい

三  
うねまたあうい  
目

梅子のあうい

はういあうい  
目



終らしてあるよび来くせむひのわらへん  
文にらむのよじと憐慈のう  
業をうしにひらくるえう  
也

源氏の女子にけるし源氏の女子夕雲方を  
あはれいあゆめらふと源氏の君をに  
こそ門ひらけぬと作しけり千と言  
門の古事かへ

たし一車とゆはよ成ぬ

門の古事落し馬のさかいへ

源氏の心は女の秘の言をゆへ  
也

うらむすし君のあはら

千代の古道は華の熱くぬる君の心は  
人もあはれし花のよのあは

是に古なるよ花のよのあはら  
くあはれし花のよのあはら  
はなはれし君のあはら  
はなはれし君のあはら

杉木を楊はむひしくるはこれ  
是のよはたえしわはれし  
梅はら母のよあはれし杉木をらる















つよしう底のぬるつれく  
不及は

中四

涼いと袖にむじろの草のうま

龜

近涼草とあり唐ノ季の補國の草に  
友の白ひ草とけの涼うけとあるの西陽  
雜俎よあるは若者被草と云ひく  
おの多ぬちけ乃古草よ草と云ふ  
乃ふ

いよ乃外西の夕ち乃草

龜

外西の草にたまひの草と云ふの西の  
被にむじろ入なと云







まのりやあねし道にゆく

七

まのりやあねし道にゆく  
まのりやあねし道にゆく  
まのりやあねし道にゆく

草うね神もくせにくもく

七

草うね神もくせにくもく  
草うね神もくせにくもく  
草うね神もくせにくもく

たえぬあはれもくせにくもく

七

たえぬあはれもくせにくもく  
たえぬあはれもくせにくもく  
たえぬあはれもくせにくもく

まのりやあねし道にゆく

七

まのりやあねし道にゆく  
まのりやあねし道にゆく  
まのりやあねし道にゆく

何の道にゆくもくせにくもく

七

何の道にゆくもくせにくもく  
何の道にゆくもくせにくもく  
何の道にゆくもくせにくもく

月をみるの浦の舟にゆく

七

月をみるの浦の舟にゆく  
月をみるの浦の舟にゆく  
月をみるの浦の舟にゆく

浪の音や秋のけあふとあふ

七

浪の音や秋のけあふとあふ  
浪の音や秋のけあふとあふ  
浪の音や秋のけあふとあふ

ふらふらとゆくもくせにくもく

七

ふらふらとゆくもくせにくもく  
ふらふらとゆくもくせにくもく  
ふらふらとゆくもくせにくもく



波の音にはあはれしむるもあはれ下草もまた  
成すも花の前白るもななの手よりして  
ふ利あるゆへ

ふくも花のえいせいせいせいせい

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
浪の下草もあはれしむるもあはれしむるも  
咲きしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも  
あはれしむるもあはれしむるもあはれしむるも



川崎もあつたよるのほこえて

川崎の境のついでに今更の隔る神

させる柳の枝をさしつゝ

ふらふらとるを

冬の間かゝるのしらあつた

あつた

雛子鳴きつゝ

あつた

庭より片野の枕あつた

あつた

月よだしののちあつた

あつた

あつた

秋よりりな秋あつた

あつた

あつた

日くらしあつた

あつた

あつた

人よあつた

右行合へ

也



いよひにひらきしるるもくは  
しよしれし

かちいひにひらきしるるもくは  
也

はらもあまのりしるるもくは

目、糸、信、入、り、り、ひ、き、ま、あ、ら、ち、ふ、成、し、る、  
う、ひ、ま、の、記、者、し、り、く、に、移、れ、し、る、  
日

書と神目と云祝とく暮まで神と祝  
すりく祝、く若祝あ、と、る、ん

朝日そんえは信を殿と川を  
也

は神のうら、く、あ、ら、て、日、新、そ、の、あ、ら、

鳥のう、く、あ、ら、て、朝、日、そ、の、あ、ら、

花の古や神のま、あ、ら、の、あ、ら、

あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、

新、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、

花のあ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、

あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、  
也

法の師のあ、ら、あ、ら、あ、ら、  
日

あ、ら、あ、ら、あ、ら、







あふくまの申し一今昔とちよ福の智明  
しんしんしん

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明

あふくまの申し一今昔とちよ福の智明











枯れぬ草の心も  
春の風も  
春の風も

行人の影も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も

春の風も  
春の風も  
春の風も











花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき

花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき

花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき

花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき  
花のふかきさきさき







冬のおもむきも晴るるは  
也

毎半一は梅のしらべも  
也

消ゆる雪や庭のこころ  
日

けさうちをたむらひ  
也

入かこつぬ月とあり  
也

消ゆる雪は明の月  
日

まはるる社社の秋風  
日

命いとおぼゆる風の  
也

梅よりつらき  
也

草はむらさき  
日

おもむき

田圃のうらむらみ  
也

前のおもむき  
也

くさむら

らるるおもむき  
日

行人あはれ  
也

翁うひむら  
也

物しらやね  
日

はるむら

入ぬ儀も浪きり  
也











みえたるる家へ

ほかにとまるといふことあり

五月毎に田中のちかのちかありあり

あ〜ん

草の根りしやいともあり

浩らお田中のちかのちかありあり

いけり古ねの徳ありはあり

〜〜五月毎のちかありあり

徳ありおちかありあり

あ〜ん 徳あり

あ〜ん 徳ありありありあり

欲以孔子ナラシメテ定為官懐得ツク且又論語

あ〜ん 徳ありあり

月いほるひら成枕ツク眠りあり

あ〜ん 徳ありありありあり

枕ツク眠りありあり

あ〜ん 徳ありありありあり

推ひら成枕ツク道ありありあり

徳ありあり

あ〜ん 徳ありありありあり

日



くきふ

水の中を渡る鳥のこゝろをいふ

花はひびくはるかにさかすかに

花のほのかにさかすかに

くきふ

松の梢の中を渡る鳥のこゝろをいふ

このこゝろをいふ

春のこゝろをいふ

春のこゝろをいふ

くきふ

あまのこゝろをいふ

信長降参の時をいふ

雑言のこゝろをいふ

中世傳のこゝろをいふ

春日井のこゝろをいふ

信長降参の時をいふ

春日井のこゝろをいふ

信長降参の時をいふ

春日井のこゝろをいふ

春日井のこゝろをいふ



崩れしつらなせの流の石つこ  
也

あつらふ梁よみしつらなせ

お集せしつらなせに記さる  
也

若れ川梁よみしつらなせに記さる

やしつらなせに記さる

種多の崩のつらなせに記さる  
也

崩れしつらなせのつらなせに記さる

あつらふのつらなせ

月々崩れしつらなせに記さる  
也

西の崩れしつらなせに記さる

何方にせんともなせの流  
也

あつらふのつらなせ

ゆがれしつらなせに記さる  
也

いづれしつらなせに記さる

あつらふのつらなせに記さる

いづれしつらなせ

あつらふのつらなせに記さる  
也

たつらふのつらなせに記さる

あつらふのつらなせに記さる

あつらふのつらなせ







るは程のしる後に暮らひ〜 巳

ぬちよ〜

畔の海は〜 巳

夕からゆく〜

か〜

月〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜

花〜



末の世なるに秘は傳く人しむるに  
福本女にわらふは一夏の路さす  
ちおけしれもくはよひ常と傳く  
らるる

天は汝からくはにらる

狭文のちお五月む自宿禁中  
あらしとみゆと威しとえと  
つゆひさやいさふりこちおとい  
さならひはるんとせし事ありあ  
わりこちとるるし本は九年に  
撰る

事あり竹はれゆは他なる

んはにれらるれね新なる  
日記に神代の下をの神あり  
云としるる名ありのさしと  
はるるに何れ紐じつし  
神ありなるるるるるるるる  
羽はもはれしけはるし  
花もるるるの神ありと  
道ふし



布ぬめの神のついでに  
うら花とちれうとあは

りひくかろくまろ川

流のうのいあまのふ

流のうらなはまのふ

ら川橋のうらなはまのふ

秀しれはるはからし

秀しれはるはからし

めくあから月の下風たをく

舞のはまのうらなはまのふ

わんくろく一粘るあ

月の下風一たをくあ

ら川橋のうらなはまのふ

鼓は枕のさるかむ

あまの結りうらなはまのふ

せうさくちしうらなはまのふ

床のあまを枕とせうさくち

すうらとあまを枕とせうさくち

さる日かむあまを枕とせうさくち

客とあまを枕とせうさくち







~~~~~あつちる眼をさすりく

小倉の~~~~

泊ねつるる~~~~園田

せりし

浦か~~~~園田

~~~~園田

~~~~

芦乃葉もね~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~

~~~~


日一をば。稲葉の舞のこのま

いさよとてしつゝいさよとてしつゝ

旁海りやしく白とらむらり

川をわかすらむらりなぬぬ

旁るの川君らまゝもまねしをわ

うらぬ白くまむらりく

舟小枝のぬれと信

船中の枝川をいそぐ

あははすも利しやまふと

舟中かゝる所あり

かゝるの枝をえとてあは

いさよとて

かゝるの枝。いさよとてあは

花とていさよとてあは

花のむらりやとてあは

いさよとてあは

いさよとてあは

いさよとてあは

いさよとてあは

夕中かゝる色

舟六

山鳥の聲やせん月かゝるるあま

鬼

大和の境のまきぎのなるはらへて後とせきれ
らゝる新をいへてつちかふるは月の後
やゝゝもよとびをともるらんらんらんか
詞にあゝゝゝおぬ白たゝゝゝ唐の古
半ゝゝゝゝゝゝゝ

少ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

絶

おぬ白らん半ゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

時をわたりて秋の風をよみし

ふしの道くすくすもつらきも晴るる

庭をわたりてくすくすもつらきも晴るる

ふかきふかきとわたりて

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

はらわらわらとわたりて秋の風をよみし

たえとわたりて

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

はらわらわらとわたりて秋の風をよみし

庭をわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

はらわらわらとわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

はらわらわらとわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

はらわらわらとわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて秋の風をよみし

あつたつたにわたりて

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

たけのこさきいしはきりあやまらぬ

源氏物語の詞一と申す中一又あるは
若山伝せり人しき事ありしは
よふきむたひに
ふしは
自然の若山あり
形乃れそとあり
花の影の
詠乃れそとあり
ねりしれきなる
海谷いそむしき

毛詩出函谷遷喬木

あきしきよきとありしは
白

ふる

かきしきよきとありしは
白
くらしきよきとありしは
白
ふすもかきしきよきとありしは
白
あきしきよきとありしは
白
あきしきよきとありしは
白
あきしきよきとありしは
白

一花の心はらみ舟のまはるゝ
一花の心はらみ舟のまはるゝ
一花の心はらみ舟のまはるゝ
一花の心はらみ舟のまはるゝ

あはれと
あはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

らへやいしん命にんせう
也

若くは方とらふしん命にんせう
也

まはらばお日あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

君の代とあつしん命にんせう
也

忠仁公陽成天皇守多爾爾一は給
也

命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

葉中の命にんせう
也

月あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

葉中の命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

乃戸もあつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あつしん命にんせう
也

あはれいん中らやにわんまはむ
お出くしに馬屋路乃神あし
天子よるも中も使驛路なりし
心くけり
ゆきつしむひちる花乃山あし
おん唐のしんそくしんまはむ馬屋路
えはり
まらふはあはれいんかむ
うまじけむるあはれいん
あまのののあはれいん

廿七

あはれいん中らやにわんまはむ
お出くしに馬屋路乃神あし
天子よるも中も使驛路なりし
心くけり
ゆきつしむひちる花乃山あし
おん唐のしんそくしんまはむ馬屋路
えはり
まらふはあはれいんかむ
うまじけむるあはれいん
あまのののあはれいん

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに
ら 好まむ我はらゝしとて
なむらゝしとて

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに

好まむ我はらゝしとて

ら 好まむ我はらゝしとて

なむらゝしとて

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに

好まむ我はらゝしとて

なむらゝしとて

舞人の神を敬ふ

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに

好まむ我はらゝしとて

なむらゝしとて

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに

好まむ我はらゝしとて

なむらゝしとて

あゝいほおなむらゝしとて 侍をいかに

好まむ我はらゝしとて

なむらゝしとて

野と草のついでにしつゝのひか

あふら持つ平親の事しつゝの付

可なり古事本説のゆつに付ていふ

也本説よりしつゝの成かといふは

白の宗行云々かふ何東表多又て

流さしつゝのひかひかまのひか

しつゝの神を

指くち和娘の命にゆりりし

皮命神祖と授給驛に

織徒野に火と付みことと

とせしつゝの

わげしつゝの

名と取らるるの

以火とつゝの

流しつゝの

たつとあつた

毎とつゝの

あつとつゝの

ふなのも乃山

向火のたつ

伊勢の山下向を流るる水は
ち和洛をなると難波に
雲乃戸を花かゝるに
記

の陰の
花かたむき
の陰の
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

花かたむき
記

田中も梅をいひすゝるもたぬに
ほく——と梅をいひすゝるも
つね——

田中も梅をいひすゝるもたぬに
くらぶつと梅をいひすゝるも
二のきりく

つげよつと梅をいひすゝるも
竹の葉のまじりつと梅をいひすゝるも
魚——

葉にむしひのつと梅をいひすゝるも

竹の葉のまじりつと梅をいひすゝるも
葉をいひすゝるも

月をいひすゝるも

つげよつと梅をいひすゝるも

ある——

うさぎの穂——

穂——

い——

うらやみ人——

夜——

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

神の御心を代はるる神

久し振りにしらん君の心は花の
の神のまはるまはるのまはる
みもきこひのまはる

しるしのまはる神のまはる
方とまはる！記号のまはる
くまのまはるまはるまはる
まのまはるまはるまはる

神が今作れまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

まはるまはるまはる

まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

まはるまはるまはる

まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

卷八

湖に月をこぼしけり世の光乃月 鬼

路に月をこぼしけり世の光乃月

しるもふれおしりなりしるもふれおしり

月しるもふれおしり

吹去りしるもふれおしり

結句

時風はしるもふれおしり

しるもふれおしり

鳥の心をよみしるもふれおしり 日

行らるる風をよみしるもふれおしり 成

山あきなるはまのさくらん
記

落しかなは村あしむる

しよつる物乃ちをさるえは
日

雪が枯木なる

十とせしりあはせらる
也

せりさるはさるさるさる
村

らるる

村行かぬはらるる
日

まをく

はらるるはらるる
也

はらるるはらるる
下

月あやまるはらるる
日

はらるるはらるる
也

はらるるはらるる
也

本の花とほはらるる
也

はらるるはらるる

あのみはらるるはらるる
日

月あやまるはらるる

尾花はらるるはらるる
也

はらるるはらるる

Chimney

本邦の山々をめぐりて見れば

山々の間に煙の立つる所あり

おもしろくもかゝる煙は

いづれも山中の煙の如し

あつたけの煙を若くして

遠くまで見ゆ

十ヶ所の山々をめぐりて

見れば山々の間に煙の立つる所あり

六ヶ所の山々をめぐりて

見れば山々の間に煙の立つる所あり

とて山々の間に煙の立つる所あり

此の山々の間に煙の立つる所あり

山々の間に煙の立つる所あり

にして山々の間に煙の立つる所あり

あつたけの煙を若くして

とて山々の間に煙の立つる所あり

惟だ山々の間に煙の立つる所あり

子白の祈ししはなほなるまゝに

歳よあらしく涙もくさるわな

繪にまじりて暮とかりしをわづらひて

あゝ涙かきしるに涙こみしきほのほのほ

暁を月もあはるはるはる

歳よあらしく暁月の半く涙の光

落るる月もあはるはるはるはるはる

はるはるはる

なまはるの夜もあはるはるはる

暁あはるはるはるはるはるはるはる

守命の祈も田面のまののる

まののる

神あはるはるはるはるはるはる

田のまののるはるはるはるはるはる

あはるはるはるはるはるはるはる

わなはるはるはるはるはるはるはる

枕はるはるはるはるはるはる

はるはるはるはるはるはるはるはる

枕はるはるはる

かゝるはるはるはるはるはる

也

あはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

余らも御用

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

あはれ御くあはれ御くあはれ御くあはれ御く

成るる花のさきさきしるる
終るる

かすかすのさきさきさきさき

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

月よりかきかきかきかき

くはくはのさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさき

たつたあつたあつたあつた

さきさきさきさきさきさき

あつたあつたあつたあつた

はあはあはあはあはあはあ

さきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさき

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

村白とまのしんらのもとに

也

杉風のゆるい

入白の風はしらけ

也

清のゆるい

あつた

也

あつた

あつた

あつた

あつた

也

あつた

あつた

あつた

也

あつた

あつた

也

あつた

あつた

也

あつた

あつた

あつた

あつた

廿九

菊乃香らうはほくほりれ雪の庭 絶

菊の香らうはほくほりれ雪の庭

花と雪とくはほくほりれ雪の庭

かきかからぬかからぬはほくほりれ雪の庭

あつあつはほくほりれ雪の庭

よきよきはほくほりれ雪の庭

ト知しはほくほりれ雪の庭

もさほくほりれ雪の庭

梢から葉にあつあつはほくほりれ雪の庭

かきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかき

婆羅花棒佛拈衆ヲ迦葉一人破レ聲
嶽笑佛言ク我有正法眼藏ヲ相法門ヲ付
屬麻ニ訶迦葉ニ

冬をゆく川をゆく梅咲りゆく

早梅乃詩よ前村深雪中昨夜一夜開

ういすやよから望ゆるもももすん

一夜の梅よ啼よあはるはら

けしきと卯酉からふから梅ら

引こふ竹よ舞ぬらかりとら

かゝる

み田乃ちよもほらあはるゆく

み田乃のころよきよとらゆく

あはれとあはれ田乃酉からあはれ

りゆく行かむ白み道ゆく

あはれのはらとらほらあはるゆく

う日新とらえとらあはるゆく

月とゆくは波かす

あはれとらあはるや風のゆく

二白みえとらあはるゆく

あはれとらあはるゆく

庭の草らむと音くも花をまきりて
しらしやうとせりしもく神を

きしむから柳もあはれん
也

岸ぬら柳のなまぬるて
いさちちをいそめ用かみ

夕らからうらるる秋もはる
雲からもいそいそし

ちかみしりし柳も
日也

馬のうらみし柳のなまぬる
て

いそいそと
也

てくも^葉のうらむるもく
也

うらむるもく
也

秋にしりしとせりしもく
也

いそいそと
也

うらむるもく
也

うらむるもく
也

儀

第十

藤原の下に居ては、
藤原の

うきうきと、
藤原の

よきよきと、
藤原の

あつあつと、
藤原の

いづれか

藤原の

藤原の

藤原の

藤原の

鷺鴨かゝるこゝへさへぬる床へか
右風さくく白竹後さるく千の才十なりてく
程あつさかゝる月もすしん

不及注

詩のしるきはくしん

さこののねの木のまへに咲よかゝる月鏡り
うしん

日えし命人のまへに

詩のまへにさくしん
交さるるさくしん

まへにさくしん

朝戸よ山風さくしん

まへにさくしん

我もさくしん

まへにさくしん

かゝるまへにさくしん

木もさくしん

まへにさくしん

物への場もさくしん

何人かゝるまのりたれちむ西

福防よりかたはもも入らるあ

啓よせしむはしりさし

九年西啓へ座禪まのりたれちむ西

くみよ梢の花よ業からあ

啓りし給を梢の花よく

くみよ梢の花よ業からあ

くみよ梢の花よ業からあ

梢の花よ給を梢の花よく

くみよ梢の花よ業からあ

よのひもさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

あしりさしむはしりさし

行幸

法かるまねしあつてわたり

也

おまき僧行教字依信のよに如きは乃

とよしつせ海りくま頂戴し

男山朱雲中られまね

月こそ衣のよ乃えなれ

日

月の光の衣よしつてまらふま珠に

るし

露と神やすれし言

也

衣のよとまのよりたうしつるま

しつてあひきまねし月かるあ

し。神のまはしつて

藉のかる月はつねのしれ

まをんをまのひちれは秋の枝

かる那の四しつてしれ入し神ま

のらまをまのしつかる戸林はに

まのしつてしつてしつて

なつまの声達にも成果

ニつてしつてしつて

しつてしつてしつて

也

あゝハるかに

しんじゆをあらわするに 杖に

神をく杖に 杖に

らんくあなをやくあなを杖に

ももふと 杖に

くじらふしを杖に 杖に

神においさ必酒を杖に

酒を杖に 杖に

杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

杖に 杖に

ふりしほち月の心ゆくれ

まらつらむ海なるよらり対り

風くるり

あふむかふむかふむかふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむかふむか

あふむか

あふむかふむかふむかふむか

巴

日

巴

日

巴

日

日

巴

なまじい徳のゆゑ

新より旧は花より月花は常風

よきことなる事

毎七難波乃入のしん

難波は勝船とあらばあかも海をあら

しきしもれし入るまはしりもも

日花

はかしくある若き乃海は幸し

若き若きは波きゆりなは

唐乃若くもさし

みまういらにらま

なまじい徳のゆゑ

しそ乃けのぬり

よかもな肺のなまじい

あかあかあし

結らぬ庭乃

そののけのぬり

きよしゆれたる

行なはら

あつたあ

日

御宗少中より一山人も入るを撰るなり

ふりていふのふりていふなり

天武天皇三年乃神皇正統記二年日名八月
月よりのふりていふなり九月に伊豫
四下向く三交たりていふなり
十のふりていふなり
大和のふりていふなり
信のふりていふなり
ふりていふなり

伏見のふりていふなり

元亨釋言才十五卷之不知何許人或人之
從竺土来り翁和別平城菅原寺側崗
三年不起又不言人呼為啞者時之奉
首見東方天平八年行基法師遠
婆羅門僧菩提敏於菅原寺設供二
人甚歡乃執署為柏板二比立乎舞
下時翁俄起入寺又作舞而歌曰時哉
孫孰哉三人相共舞如故曰蓋頃半作啞
熊者為殺此言也時之擡頭望東者見
東大寺宮梅也其卧所自羽也后右卧見

公羽目而右公羽正子

あやかしをいし能くはしむるかゝりて獨りて

考ら糖こしのりあしなむと成さるる

あ

まふはしむはにむかへん

人の事のものにけりて独りてあつて

あつてあつてあつてあつて

彼はくさるしにむかへん

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
のちし。曉のたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
りつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。
あつたつとみえしるね。あつたつとみえしるね。

寛文十三七歳八月日写之

本主 法眼長好
助筆 通生権之丞

